

国立国語研究所 非常勤研究員

諸隈夕子

y.ukumari322@gmail.com

要旨

アヤクーチョ・ケチュア語は2種類の動詞体言化接尾辞 *-sqa* と *-na* を持っている。*-sqa* と *-na* による体言化は、多くの文法的共通点を持つ一方、前者は非未来、後者は未来のテンスを標示する点で異なっている。本発表は、この2種類の体言化 *-sqa* 体言化と *-na* 体言化の機能的差異を、Parker (1963) によるアヤクーチョ・ケチュア語の民話集を元にしたコーパス調査に基づいて分析するものである。調査の結果、以下の3点が明らかになった。i) *-sqa* 体言化は、*-na* 体言化よりも使用頻度が高い。ii) *-sqa* 体言化も *-na* 体言化も、先行研究で中心的に報告されていた名詞修飾用法や補文用法よりも、副詞句用法が頻繁に見られる。iii) *-sqa* 体言化は主節と継起・共起関係にある副詞句や行為動詞の目的語、知覚動詞の補文を中心に様々な機能で用いられる一方、*-na* 体言化は行為の目的を表す副詞句としての用法が支配的である。この調査結果は、時制の違いによる機能の非対称性は、体言化においても見られることを明確に示している。本研究は、体言化研究における時制の重要性を示唆するものである。

1. はじめに

- アヤクーチョ・ケチュア語は、ケチュア語族の言語である。
 - ペルー南部のアヤクーチョ県を中心に、約80万人の話者に用いられている。
- アヤクーチョ・ケチュア語は、膠着的な文法的特徴を持っている。
 - テンスやアスペクト、格など種々の文法的機能を接尾辞によって標示する。
- この言語は2種類の動詞体言化接尾辞 *-sqa* と *-na* を持っている。
 - *-sqa* と *-na* は動詞語幹に接続することで体言化 (Shibatani 2019) を形成する。
 - ◇ 体言化とは、節や動詞、名詞など様々な文法的要素から、メトニミーに基づき、意味的には元の指示内容と関連するモノ的概念を指示する文法的要素を派生¹したものである。
 - 例えば、節の体言化は、元の節で表される出来事の参加者や結果物を表すことがある。
 - ◇ 体言化は、文法的には名詞に準じる機能を持つ。例えば、体言化はしばしば動詞の項となる。
 - さらに、体言化は名詞修飾として機能する場合もある。名詞修飾としての用法は、伝統的には関係節と呼ばれる。
 - アヤクーチョ・ケチュア語における動詞体言化接尾辞 *-sqa* と *-na* による体言化は、意味的にも文法的にも様々な機能を果たし得る構造である。
- *-sqa* と *-na* による体言化は、文法的には指示、名詞修飾、動詞修飾などのさまざまな機能を持つ (Parker 1969; Zariquiey & Córdova 2008)。
 - (1) と (2) は、それぞれ *-sqa* と *-na* による体言化の名詞修飾としての用法を示したものである。

¹ 以下、本稿ではこの派生プロセスを体言化現象と呼び、派生プロセスの結果である表現を体言化と呼ぶ。

- (1) *yanu-sqa-yki* *mikuna* … (2) *tusu-na-y* *carnaval* …
料理する-**非未来体言化**-2SG 料理 踊る-**未来体言化**-2SG 祭り
「あなたが食べた料理」 「私が踊る予定の祭り」
(Zariquiey & Córdova 2008, p. 160) (Zariquiey & Córdova 2008, p. 223)

◇ (1) における *yanu-sqa-yki* 「あなたが料理した」は名詞 *mikuna* 「料理」、(2) における *tusu-na-y* 「私が(未来に)踊る」は、名詞 *carnaval* 「料理」をそれぞれ修飾している。

- -*sqa* 体言化と -*na* 体言化は、多くの文法的共通点を持っている。
 - -*sqa* 体言化と -*na* 体言化は、どちらも主語の人称を所有者人称標示で表示する。例えば (1) では、主語が二人称単数であることが二人称単数の所有者人称標示である -*yki* で標示されている。
 - 名詞修飾としてはどちらも節内の主語にあたる要素を修飾できない²。例えば (3)、(4) のように体言化を受ける節 *tanta-ta miku...-n* 「パンを食べる」の主語にあたる要素 *runa* 「人」を修飾することはできない。

- (3) **tanta-ta miku-sqa-n* *runa* (4) **tanta-ta miku-na-n* *runa*
パン-ACC 食べる-**非未来体言化**-3SG 人 パン-ACC 食べる-**未来体言化**-3SG 人
(「パンを食べた/食べている人」を意図) (「パンを未来に食べる人」を意図)

- 一方 -*sqa* と -*na* は、前者は非未来 (1)、後者は未来 (2) のテンスを表す点で異なっている。
 - 例えば (1) では、体言化を受ける節 *qam miku...-yki*³ が表す「あなたが食べる」という事象が過去または現在に起きていることを -*sqa* が標示している。
 - 一方 (2) では、同じ事象が未来に起きることを -*na* が標示している。
- しかし、-*sqa* 体言化と -*na* 体言化の時制以外の機能的差異については、体系的記述が未だ見られない。
 - -*sqa* 体言化、-*na* 体言化の記述は、現状 (1) (2) に示すような用法の個別的報告にとどまっている (Parker 1969; Zariquiey & Córdova 2008)。
 - この2つの体系的差異に注目した研究は管見の及ぶ限り無い。
- -*sqa* 体言化と -*na* 体言化の機能的差異は、非未来・未来の時制の非対称性 (Sarkar 1998) と体言化の機能の拡大 (Yap & Grunow-Hårsta 2010) という2つの類型論的問題をまたぐ課題である。
 - 時制の非対称性は、通言語的に主要な動詞の文法的カテゴリーとなる時制・アスペクト・ムードの接点を考察する上で重要な現象である。
 - 体言化の機能拡大は、文法化を通じた統語論と意味論のインターフェースとして重要な現象である。

² 体言化を受ける節内の主語にあたる要素を体言修飾する場合は、-*sqa* または -*na* とは異なる体言化接尾辞 -*q* を用いる。例えば、(3)、(4) が意図する「パンを食べた/今食べる/未来に食べる人」は、*tanta(-ta) miku-q* (パン-ACC 食べる-主語体言化) と表現することができる。

³ -*yki* は二人称単数の所有者人称接尾辞である。この -*yki* は体言化を伴わない動詞には接続できないが、-*sqa* および -*na* 体言化に対しては二人称単数の主語人稱接尾辞として接続する。

であり、格標示を伴う体言化副詞句とは区別する。

- どのような意味を果たしているか。
 - ✧ 主節主要部となる動詞句と意味的にどのような関係にあるかに注目した。
 - 項としては行為の主体か、行為の対象か、発言の内容かという観点で分類した。
 - 副詞句としては継起、共起のような時系列的関係か、目的、理由のような因果関係かという観点で分類した。

3. 調査結果

- コーパス調査の結果、9編の物語（3571語）から、124個の文法的体言化の用例が抽出された。
 - ✧ うち *-sqa* の用例は74例、*-na* の用例は50例であり、*-sqa* 体言化は *-na* 体言化に比べて使われる頻度が高いことがわかった。

3.1. *-sqa* 体言化と *-na* 体言化の文法的性質

3.1.1. 主要部の有無

- 主要部の有無に着目すると、*-sqa* 体言化、*-na* 体言化ともに主要部無しの用法が大半を占める。
 - 表1は、*-sqa* 体言化と *-na* 体言化の使用頻度を主要部の有無ごとに集計したものである。

表1 *-sqa* 体言化・*-na* 体言化の主要部の有無ごとの頻度

	主要部あり		主要部無し		合計	
<i>-sqa</i>	5	6.8%	69	93.2%	74	100%
<i>-na</i>	2	4.0%	48	96.0%	50	100%
合計	7	5.6%	117	94.4%	124	100%

3.1.2. 文法的機能

- *-sqa* 体言化は項としての用法と副詞句としての用法がほぼ同等の割合である一方、*-na* 体言化は、副詞句としての用法が支配的である。
 - 表2は、*-sqa* 体言化と *-na* 体言化の使用頻度を文法的機能ごとに集計したものである。
 - ✧ ここでは主節動詞句との関係に注目し、体言修飾の例は集計から除いた（第2節参照）。
 - ✧ 「格標示付き副詞句」は格標示を伴って動詞を修飾する体言化、「副詞句」は格標示を伴わずに動詞を修飾する体言化を指す。

表2 文法的機能ごとの *-sqa* 体言化・*-na* 体言化の使用頻度

	項	格標示付き副詞句		副詞句	合計			
<i>-sqa</i>	34	49.3%	17	24.6%	18	26.1%	69	100%
<i>-na</i>	11	22.9%	37	77.1%	0	0.0%	48	100%
合計	45	38.5%	54	46.2%	18	15.4%	117	100%

- *-sqa* 体言化では34例（全69例中の49.3%）が動詞の項、35例（全74例中の50.7%）が副詞句と

しての用法である。

- *-na* 体言化は 37 例 (全 48 例中の 77.1%) が副詞句としての用法である。(5) と (6) はそれぞれ *-sqa* 体言化と *-na* 体言化の副詞句用法の例である。

(5) *kimsa-nku supay wasi-ta ri-pu-nku taytacha piña-chi-sqa-n-manta*
 3.NUM-3PL 悪魔 家-ACC 行く-AND-3PL 神 怒る-CAUS-非未来体言化-3SG-ABL
 「彼ら 3 人は神を怒らせたので地獄へ行った」(Parker 1963, p. 27)

(6) *qullqi-ta-wan puklla-na⁴-kuna-ta suwa-ka-mu-n ... puklla-na-n-paq*
 お金-ACC-COM 遊ぶ-未来体言化-PL-ACC 盗む-REFL-VEN-3SG … 遊ぶ-未来体言化-3SG-BEN
 「お金とおもちゃを (……) 遊ぶために盗んできた」(Parker 1963, p. 19)

- *-sqa* 体言化と *-na* 体言化の副詞句としての用法には大きな違いが見られる。
 - *-sqa* 体言化には一定数見られる (全 69 例中 18 例、26.1%) 格標示無し副詞句の用法が、*-na* 体言化にはほとんど見られない。(7) は *-sqa* 体言化における格標示無し副詞句の用法である。
 - *-na* 体言化の副詞句用法は、全て (6) のような格標示付き副詞句として現れていた。

(7) *paya-cha=qa wañu-ku-n allin maqa-sqa*
 おばあさん-DIM=TOP 死ぬ-REFL-3SG 良い 殴る-非未来体言化
 「おばあさんはひどく殴られて死んだ」(Parker 1963, p. 3)

3.2. *-sqa* 体言化と *-na* 体言化の意味的性質

- さらに *-sqa* 体言化と *-na* 体言化が表す意味に注目すると、大きな差異が見られる。
 - 表 3 は、主要部の無い *-sqa* 体言化と *-na* 体言化の使用頻度を意味ごとに集計したものである。

表 3 意味ごとの *-sqa* 体言化と *-na* 体言化の使用頻度

	行為の 参与者	修飾される 実体	実体を修飾 する出来事	時間的に隣接 する出来事	時点を示す 出来事	因果関係に ある出来事	知覚・発話の内容 となる出来事	合計								
<i>-sqa</i>	13	18.8%	4	5.8%	3	4.3%	25	36.2%	1	1.4%	8	11.6%	15	21.7%	69	100%
<i>-na</i>	4	8.3%	1	2.1%	0	0.0%	0	0.0%	6	12.5%	31	64.6%	6	12.5%	48	100%
合計	17	14.5%	5	4.3%	3	2.6%	25	21.4%	7	6.0%	39	33.3%	21	17.9%	117	100%

- *-na* 体言化に比べて、*-sqa* 体言化は使われる意味の幅が広い。
 - *-sqa* 体言化は、7 種類の用例が観察された。
 - ◇ 7 例の機能の中では、i) (9) のように主節の出来事と時間的に隣接する出来事を表す副詞句 (25 例、36.2%) が最も多く、次いで ii) (10) のように「渡す」など行為を表す動詞の参与者

⁴ 本稿ではこの *puklla-na* (遊ぶ-未来体言化)「おもちゃ (lit. 遊ぶもの)」を語彙体言化として分析している。

(13例、18.8%)、iii) (11) のように「知る」「感じる」などの知覚動詞や「言う」などの内容 (15例、21.7%) を表すことが多かった。

- (9) *chay-man ri-sqa-n-pi* … *lliw arwita-ku-ru-n*
 そこ-DAT 行く-非未来体言化-3SG-LOC 全て 絡めとる-REFL-PST-3SG
 「そこに行く(と) (……) すっかり (イバラに) 絡め取られてしまった」 (Parker 1963, p. 27)
- (10) *kisu qu-sqa-n-ta miku-y-ta tuku-ru-pti-n=ña=taq* …
 チーズ 与える-非未来体言化-3SG-ACC 食べる-INF-ACC 終わる-PST-SR.DS-3SG=COMPL=CONTR
 「買ったチーズ (lit. チーズをもらったの) を食べ終わると……」 (Parker 1963, p. 13)
- (11) *mana aswan ka-sqa-n-ta qawa-yku-spa-nku* …
 NEG さらに COP-非未来体言化-3SG-ACC 見る-中に-SR.SS-3PL
 「もうそれ以上 (チーズが) 無いのを見ると……」 (Parker 1963, p. 11)

◇ *-na* 体言化は、5種類の用例が観察された。

- *-na* 体言化は、v) (12) のように主節と因果関係にある出来事を表す副詞としての機能が支配的 (58.0%) であった。

- (12) … *huk warma-ta uywa-sqa wasi-n-pi yanapa-na-n-paq* …
 1.num 少年-acc 育てる-pst.hys 家-3SG-LOC 助ける-非未来体言化-3SG-BEN
 「家事の手伝いをさせるために (lit. 家で手伝うように)、1人の少年を育てた」 (Parker 1963, p. 19)

4. 議論

4.1. *-sqa* 体言化および *-na* 体言化の文法的機能

- アヤクーチョ・ケチュア語の *-sqa* 体言化および *-na* 体言化は、副詞句としての用法が多い。
 - 体言化は補文や名詞修飾としての機能が中心的に議論されてきた (Shibatani 2019) が、表 2 で示すようにアヤクーチョ・ケチュア語では副詞句としての用法が中心的である。
 - アヤクーチョ・ケチュア語の体言化は、体言化における副詞句用法の重要性を示している。
- さらに *-sqa* 体言化は、格標示を伴わずに副詞句として機能する用法が多い。
 - この用法は体言化でない体言では見られず、本研究の調査結果では *-na* 体言化にも見られなかった。
 - *-sqa* 体言化は、*-na* 体言化よりも文法化の要素の一つである脱範疇化 (Heine & Kuteva 2002, p. 2) が進んでいると言える。

4.2. *-sqa* 体言化および *-na* 体言化の機能的差異

- アヤクーチョ・ケチュア語の *-sqa* 体言化と *-na* 体言化は、統語的には多くの共通点を持ちつつ、表される意味の傾向には大きな差異が見られる。
 - *-sqa* 体言化は主節と継起・共起する出来事や、知覚や行為の対象となる事物を表すことが多い。

- *-na* 体言化は主節で表す出来事の目的を表すことが多い。
- 本調査で明らかになった *-sqa* 体言化と *-na* 体言化の意味ごとの頻度の差の一部は、時制の性質によって説明できる。
 - 非未来時制と未来時制の性質の非対称性は、英語の助動詞 *will* の機能をはじめ様々な言語で議論されている (Giannakidou & Mari 2018, Robertson & Roberts 2023)。
 - 行為や知覚の典型的な対象は実在する事物のため、過去・現在を表す *-sqa* 体言化で表現されやすい。
 - 行為の目的は典型的には将来的に実現する事物のため、未来を表す *-na* 体言化での表現頻度が高い。
- しかし、時間的隣接関係の表現の頻度は時制の性質だけでは説明できない。
 - 継起または共起する出来事のように主節の出来事と時間的に隣接する出来事は、*-sqa* が表す過去や現在だけでなく、*-na* が表す未来の出来事でもありうるが、*-na* 体言化では表されなかった。
- この時間的隣接関係の表現における非未来時制と未来時制の非対称性は、過去・現在・未来の出来事に対する人間の認知の働きの違いによると言える。
 - 人間にとって、過去や現在の出来事は直接知覚・記憶することができるが、未来の出来事は直接知覚することはできない。
 - 従って、時間的隣接関係に加え目的のように話し手の意思が介在する表現が好まれると考えられる。
- 本稿は、体言化および体言化現象研究における非未来時制と未来時制の非対称性の重要性を示すものである。
 - 時制の非対称性は、体言化研究では注目されることが少ない。
 - 体言化における時制に基づく機能の非対称性を、質的観点に加えて量的観点で示した。

参考文献一覧

- Giannakidou, Anastasia & Alda Mari (2018) A Unified Analysis of the Future as Epistemic Modality. *Natural Language & Linguistic Theory* 36(1). 85–129.
- Heine, Bernd & Tania Kuteva (2002): *World Lexicon of Grammaticalization*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Parker, Gary John (1969) *Ayacucho Quechua Grammar and Dictionary*. The Hague: Mouton.
- Robertson, Cole & Seán G. Roberts (2023): Not When but Whether: Modality and Future Time Reference in English and Dutch. *Cognitive Science* 47(1). e13224.
- Sarkar, Anoop (1998) The Conflict between Future Tense and Modality: The Case of Will in English. *University of Pennsylvania Working Papers in Linguistics* 5(2). 91–117.
- Shibatani, Masayoshi (2019) What is nominalization? Towards the theoretical foundations of nominalization. In Roberto Zariquiey, Masayoshi Shibatani and David W. Fleck (eds.), *Nominalization in Languages of the Americas*, 15–167. Amsterdam: John Benjamins.
- Yap, Foong Ha & Karen Grunow-Hårsta (2010) Non-Referential Uses of Nominalization Constructions: Asian Perspectives. *Language and Linguistics Compass*. 4(12). 1154–1175.
- Zariquiey, Roberto & Gavina Córdova (2008) *Qayna, Kunan, Paqarin. Una Introducción Práctica al Quechua Chanca*. San Miguel: Pontificia Universidad Católica del Perú.